九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# 唐代別離考 : 送別詩をめぐって

松﨑, 治之
筑紫女学園短期大学 : 助教授

https://doi.org/10.15017/9743

出版情報：中国文学論集. 13, pp.112-141, 1984-12-31. The Chinese Literature Association, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

# 唐代別離考——送別詩をめぐって——

松　﨑　治　之

## 一

唐詩を概觀するに、そこで尊重された感情、つまりそのリリシズム（叙情的な味わい）を代表するものは、洋の東西に普遍的な戀や愛ではなく、男同志の厚い友情であった。そしてそれは、送別の詩に顯著に描出されているように思われる。

むろん、これについては、對照的に王維の「酒ヲ酌ンデ裴廸ニ與フ」(1)（七律）、高適の「邯鄲少年行」(2)（七古）、杜甫の「貧交行」(3)（七古）、張謂の「長安ノ主人ノ壁ニ題ス」(4)（七絶）などに見られるように、交情の輕薄さを嘆いた詩もなくはない。

だがしかし、それも友情を信ずればこその嘆きであって、おおむね唐代の詩人たちの間は、善意と信頼にみちた

深い友情で結ばれていたように見うけられる。

それは送別、留別、贈答、尋訪など、交遊の動静を描寫した詩の多いのが、その一證左てあって、なかでも送別、留別などに叙情詩としての佳作が多いのが、なによりもそれを裏つけていよう。

とにかく、これら送別、留別などの詩に、私は唐代の詩人たちの厚い友情や、友情の美しさを思い知らされることが多い。

それでは、なぜそのように送別、留別の詩が多く殘されたのであろうか。

それに對しては、叙情詩の性格からして、まず、送別、留別の機會か多かったということがおのずと考えられる。

だとすれば、送別の機會はなぜ多かったのか。あるいはまた、その送別の事象を描出した詩人たちとは具體的に如何なる人々かということが連想される。

そしてその答えとしては、詩人たちとは、おしなべて當時下級の官吏に終わった者が、ほとんどであったというのが、その史的實情てあったということ。もちろん、高級な官吏にまて進んだ者として王維、元稹、白居易などあるにはあるが、それはむしろ例外的な存在で、詩人といえば地方官を轉々としている不遇者としてのイメーシさえ與えられていた。そしてそれが、普遍的な實態であったところにそれら送別詩の多産の由來があるというふうに理解している。

具體的には、下級官吏である詩人たちは、そうした不運な事情から、旅をする機會も多く、それにともなって送

別詩が作られる契機も、おのずと多かつたというセオリーも成立するというのが、私の送別詩、留別詩の多く殘されていることに對する一つの認識てあり、見解てある。

さらに、かれら詩人たちは、既存の貴族階級に對して、新興の地主階級出身の官吏として、一種の連帶感をともなう友情によって結ばれていたという思いが強い。だから送別の詩も、單なる惜別の詩ではなく、友情の證(あかし)として、その眞情を表明するものてあった。

また、詩人が官吏であったがために、詩を官吏社會の中て、社交の具に供する場合が多かった。そこておのずと詩の內容も公的な性格を帶びる場合が多く、送別の宴席も、往々にして公的な改まった場となった。

さて、改まった公的な場てあればこそ、詩人たちはそこての嚴肅な惜別の行爲を丁重に受けとめた。

したかって、そのような心情が多くのすぐれた作品をうみだし、送別詩の樣式をつくりあげていったものと推察されもする。

この拙稿ては、唐代の離別詩の中ても、送別にかかわるセレモニー（樣式）と、送別の詩に見られる詩風について論述し、詩人の氣質についてもふれてみたいと思っている。

## 二

まず、送別、離別のさいの慣習的セレモニーは、洋の東西を問わず、どこの民族にもあろう。旅立つ人の道中での無事、平安を祈る氣持を、送る人がなんらかの行爲て示すことは、人々の素朴な善意のあらわれて、人間なれば

ごその所爲でもある。

わが國でも、「馬の鼻向け（餞）」〈十巻本字類抄〉や、「馬の鼻を立てなおす」という、旅の門出に、行路の安全を祈って、その旅立つ方向へ乘馬の鼻を向けてやるといった送る人の厚意を示す所爲がある。それは王朝（平安）の昔から文獻に記載されている。(5)

それでは、その點について唐代送別詩の中で絶唱といわれている王維（盛唐）の「元二ノ安西ニ使スルヲ送ル」という七絶を素材として論述してみよう。

渭城朝雨浥輕塵　渭城ノ朝雨輕塵ヲ浥シ
客舍青青柳色新　客舍青青柳色新タナリ
勸君更盡一杯酒　君ニ勸ム更ニ盡クセ一杯ノ酒
西出陽關無故人　西ノカタ陽關ヲ出ヅレバ故人無カラン

詩題は、『王右丞集』をはじめ、明の陸時雍の『詩鏡』、同じく明の卓明卿の『唐詩類苑』、清の王漁洋の『唐人萬首絶句選』などでは、「送元二使安西」に作り、宋の郭茂倩の『樂府詩集』、清の彭定求等が編集した『全唐詩』、同じく清の蘅塘退士の『唐詩三百首』などには、「渭城曲」と記され、『白氏文集』には、「陽關」と記載され、さらに宋の魏慶之の『詩人玉屑』では、王維「贈別」となっている。

そして『樂府詩集』（巻八十）の「渭城曲」の注には、――「渭城ニ陽關ト曰ヒ、王維ノ作ル所ナリ。本人ノ安西ニ使スルヲ送ル詩ニシテ、後ニ遂ニ歌ハル」と説明されている。

したがって、「送元二使安西」が、この詩の本來の題であったが、詩が一端、世に出ると一世を風靡し、樂府として歌われるようになると、詩題も「渭城曲」・「陽關曲」と樂府的な題で呼ばれるようになったものであろう。「贈別」は、廣義の一般的な呼稱と考えられる。よってこの詩の場合、『王右丞集』にもとづいて、「送元二使安西」とするのが妥當であろう。

さらに、實際送別のさい、宴席で樂曲にあわせて歌われ、そのうたい方が、結句の「西ノカタ陽關ヲ出ヅレバ故人無カラン」を三度くりかえして歌うところから、俗に「陽關三疊」ともいわれている。

この詩は、元二（人物については不明）という友人が、陽關という關所を通って、安西都護府に官命で使いするのを、王維が長安からその北西郊にある渭城まで見送って行き、その渭城で一夜送別の宴を催し、共に宿泊し、翌朝いよいよ袂を分つさいの情景を歌ったものである。

この渭城の町に降る朝の春雨は、路上の砂ぼこりをしっとりとぬらし、旅館の前の柳は、雨にぬれて、ひとしお綠の色があざやかである。さあ君よ、もう一杯この酒を飲みほしてくれ。これから西のはての陽關を出たならば、親しい友もいないことだろうから。

とくに前半二句の描寫はデリケートな色彩感覺に裏打ちされたイメージをもち、「朝雨」といい、「輕塵ヲ浥シ」といっただけで、王維らが前日から渭城まで來て、一夜送別の宴を開いたこと、渭城に來た日は、晴天でほこりっぽい日であったこと、それが一夜明けると朝方の雨でしっとりぬれてすがすがしい感じに變わったこと、すべてのものが新鮮でみずみずしい中で、ひときわ目立っているのが柳の綠の色彩であることなどが讀みこまれ、そのすが

すがしい氣分が、「新」の一字で的確に示されている。この新鮮で美しい柳の描寫は、送別、離別という哀愁の様相を可能なかぎりの佳麗さで表現せねばやまぬといった王維の詩作精神のあらわれであろうか。そのために遠く塞外に赴く元二のうらがなしい心情をいっそうかきたてているし、さらには後半二句の友への呼びかけの詩句が、しみじみとした友情を溢れるように傳えて、人の心をゆさぶり、とりこにする。ここには悲壯な身ぶりや悲痛な訴えもなく、ただ別離の哀感が、じわじわと人の心にしみこんでくるのである。

さて、以上の分析、鑑賞を通して、送別のさいの慣習や方式をまとめると、次の様に三つの事象に整理される。

第一に、旅立ち、つまり送別の時期は、春が普通であったらしいということ。

第二に、旅立つ人が、親しい友や知人の場合、出發地を旅立つ人と見送る人とが一緒に旅立ち、一日行程の町や村まで出向き、そこでともに宿泊し、送別の酒を汲みかわし、翌朝そこで袂をわかつたということ。

第三に、袂をわかつさいに、見送る人が、旅立つ人に對して、楊柳の枝を折って手向けるという風習があったということ。

これら三つの事象が、傳統的な送別詩から勘案される送別のさいの普遍的なセレモニーである。

そこで、第一の事象である春という時期については、使者として旅立つたり、人事異動で轉勤するといった公的な場合、春が多かったということであろう。というのは、王昌齢（盛唐）の「芙蓉樓ニテ辛漸ヲ送ル」(6)（七絶）では、友人の辛漸が洛陽に歸るのを王昌齢が「寒雨（氷雨）」の季節に見送っているが、これは多分私的な場合と判斷されることが、逆にそのことを裏づける一證左でもある。

次に、第二の事象と第三の事象は、いずれも見送る人の厚意である。いわば、二重に示された手厚い善意の意思表示といえよう。

だとすれば、こうした手厚い善意にみちたセレモニーの原因は、何に由來するものであろうか。

これに對しては、皮相な見解ではあるが、魏の曹植の『愍志賦』に見える「哀シキハ永絶ヨリ哀シキハ莫ク、悲シキハ生別離ヨリ悲シキハ莫シ」をはじめ、北齊の顏之推撰になる『顏氏家訓』巻二・風操第六の「別レハ易ク、會フコト難ケレバ、古人（別離ヲ）重ンズ……」とか、杜甫（盛唐）の『衞八處士ニ贈ル』(7)（五古）の冒頭句「人生相見ザルコト、動モスレバ參ト商トノ如シ」などといった辭句の意義が連想させられるが、たしかに、中國の古代・中世の人々にとって送別、離別という事象は、旅立つ人と見送る人との永別を意味する實態が、あまりにも普遍的な現象であったところから生じた再會に對する切なる願いを表示した丁重な所爲であったように思われてならぬ。

もちろん、以上の三つの慣習的事象を同時に作品に並存させている例はまれである。その點でも、王維の「元二ノ安西ニ使スルヲ送ル」七絶は、その三つの事象を兼ねそなえた送別詩のティピカル（典型的）なものといえよう。

ちなみに、その例を二・三ひろって送別のセレモニーの一端を披瀝してみよう。

(1)李白（盛唐）の「黃鶴樓ニテ孟浩然ノ廣陵ニ之クヲ送ル」(8)（七絶）の場合は、起・承句の「故人西ノカタ黃鶴樓ヲ辭シ、烟花三月揚州ニ下ル」に、第一、第二の事象がふくまれている。

すでに引用している(2)王昌齡（盛唐）の「芙蓉樓ニテ辛漸ヲ送ル」（七絶）の詩などは、第二の事象のみのそれで

ある。具體的には、友の辛漸が洛陽に歸るのを、王昌齡が江寧（南京）から一緒にこの芙蓉樓まで見送ってきて、この樓にともに一泊して、翌朝辛漸と別れたいきさつか、前半の「寒雨江ニ連ナノテ、夜吳ニ入ル。平明客ヲ送ッテ楚山孤ナリ」という句中の「吳ニ入ル」と「平明客ヲ送ッテ」の語句で明示されている。

(3)楊巨源（中唐）の「折楊柳」[9]（七絶）では、送る者、送られる者の心情をストレートに表現せず、柳に託してさりと歌い流しているのが印象的である。この詩では、起・承句で第三事象を「水邊ノ楊柳綠煙ノ糸、馬ヲ立テ君ヲ煩（わづら）ハノテ一枝ヲ折ル」と明示している。

ここで、わが國の古典に見える「馬の鼻向け」に相當する第三の事象である楊柳の枝を折る行爲と、その折った枝を旅立つ人に、見送る人が手向けたという慣習の由來について、さらに論及してみよう。

「柳の枝を手折（たを）る」という事象は、古く『詩經』の齊風・東方未明篇の第三章に見える「柳ヲ折リテ圃（ほ）ニ樊（はん）スレバ、狂夫モ瞿瞿（くく）タリ」が記載されたものの最初と思われる。

次に、漢代には、旅立つ人を見送って、長安から霸橋まで來て、柳の枝を折って贈別し、再會を約した故事が、六朝無名氏の遺作である『三輔黃圖』（長安の古蹟についての書）卷六に、「霸橋、在長安東。跨水作橋。漢人送客到此橋、折柳贈別」と、記してあるから、柳の枝を折って旅立つ人に手向ける行爲は、漢代以來の風習であることはすでに立證ずみである。

さらにまた、柳の枝を折る事象が、『折楊柳』という辭句をうみだし、柳の枝を贈って別れたことから、それが「送別の曲」の名稱ともなっていった。そして魏・晉・南北朝には、樂府の題として頻出するようになるが、當時

としては、主に戰爭時の苦痛、悲哀の情を吐露した曲の感を呈していたという。その點について、南朝の『宋書』五行志には、「五行志曰、晉太康末、京洛爲折楊柳之歌、其曲有兵革苦辛之辭」と、記載されている。

それが唐代になると、詩の世界の中で楊柳は送別、離別を象徴する、人に身近かな植物として親しまれていったものと思われる。

それでは、なぜ楊柳の枝が旅立つ人の道中の無事と安全に對する祈りをことよせるのにふさわしかったのかということについて論及してみよう。

そのいわれとして、四種類の解釋が通説として存在している。

第一の説は、「柳」は音が「留」と通じることから、緣起をかつぐものだということ。つまり「柳」という文字そのものに言靈的な力を認め、旅立つ人の生命の在留を假託したものである。

『樂府詩選』において、余冠英氏は、「柳」は音が「留」と通じるので、「折柳」は「留客」の意味という。要するに、柳を折るのは、送る者か旅立つ者を引き留めるという働きがあって、旅立つ人が自分で柳を折る場合は、惜別の意志表示であるという。

第二の説は、柳の枝を輪にして贈った風習に對しては、柳の枝を輪にすると、はねかえってすぐもとにもどるので、別れてもすぐ再會できるという心情をその柳の柔軟な資質に託したものである。

例えば、張喬（晩唐）の「維揚ノ故人ニ寄ス」(10)（七絶）の起句には「離別河邊ニ柳條ヲ綰ヌ」と、「離別河邊ニ柳條ヲ綰ブ」の二通りの讀解がある。

釋清潭氏は、『三體詩』の釋注で、「綰」を「わがぬ」と訓讀し、「枝を環の形にワガネルなり。環は還なり。早く還られよとの意を寓す」と、パラフレーズされて、環還音通によるとされている。一方、村上哲見氏は、同じく『三體詩』の譯注の解説において、「綰」はむすぶ、つなぐ。手折った枝をたわめて結ぶのであろう」と、されて、溫庭筠（晩唐）の「折楊柳」[11]（七絶）の轉句「如今綰ビテ同心結ヲ作ス」を例證としてある。結局、綰は還であって、速還の意である點では、二者同一である。

第三の説は、柳の枝、とくにしだれ柳は細く長いものであるから、柳の長い枝に『長相思』という人の思いを通わせて使用したのであるということ。つまり柳の枝を折るのは、長くいつまでも人を思うという情をこめるものであり、これを折って旅立つ人に贈れば、その旅人を長く思う意味になるという。

孟郊（中唐）の「折楊柳」[12]（五古）の九・十句に「言ヲ莫カレ短枝ノ條、中ニ長ク相ヒ思フ有リ」と、あるが、これはそれを明示する一例である。

第四の説は、柳の枝を同心結にして、友人や戀人に贈れば、同心の誓を示すことになり、友人に對しては、友情の不變を表わし、戀人に對しては、二心を持たぬ告白となるというものである。[13]

さて、柳の枝を折って旅人に贈るのは、漢代以來の風習であることは確かだが、だからといって漢の頃から柳の長い枝にことよせて、『長相思』の心情を託したり、枝を曲げて同心結として、旅人に贈ったかどうかは根據希薄といった感をまぬがれぬ。

したがって前述した四種類の通説も、時流の中で、その意義づけが付加されていったように思われる。

つまり、當時（古代・中世）、旅人の道中に對する危機・恐怖・不安は深刻なものであった。そして旅には生命を保障するものがなかった。しかも、人間の力ではどうにもならないそういう危機や恐怖に對して、何物かにすがりたいといった人のひ弱い心根が、いつのまにか前述の四つの通說のような楊柳への心情の假託をうみだしていったものであろう。[14]

してみると、楊柳と送別とのかかわりは、人間に身近な植物に不安・恐怖につつまれている旅の無事安全を託するという素朴な祈りの心情がその發端と考えられる。

したがって、前述した「折柳」は「留客」を意味するという第一の通說と、旅立つ人の「速還」の意味をもつ第二の通說などが、柳の枝を手折って旅人に贈る風習の發祥時にうみだされた素朴な心情であったと理解するのが自然ではあるまいか。

極論ではあるが、「楊柳」を身近な植物としての親密感から、いつのまにか依賴できる神秘な植物に見たて、生活の中で無事、平安を託せる植物としてのとりあつかいを、いわば自然發生的に庶民的な信仰の中からうみだしていったというのが、素朴にして單純な事實であったろうと推論するものである。

あるいはまた、贈られた柳の枝は、旅人自身にとって、不安定な心の鎭靜劑として、魔除（まよけ）・護符（まもり）の代用となったものではなかろうかという推理もうみだされる。

だとすれば、楊柳と魔除・護符のかかわりはあるのかということになるが、それを私は、すでに引用し前述している『詩經』齊風・東方未明篇の第三章の前半二句を根據になる素材として指摘するものである。

折柳樊圃　柳ヲ折リテ圃ニ樊スレバ、
狂夫瞿瞿　狂夫モ瞿瞿タリ。
不能辰夜　辰夜スルコト能ハズ、
不夙則莫　夙カラザレハ則チ莫シ。

弱く柔かい柳の木を折って菜園のまかきを作ったところで、盗人をふせぐ益にはなるまいと思うが、それでも愚かなものか、それを見たら菜園に踏み入ることをためらうであろう。

毛傳では、「柳ヲ折リテ藩ノ圃ト爲スモ禁ズルニ益ナシ」というが、たしかに柳の枝ぐらいでは、盗難予防としては、大して役にもたたぬであろう。

しかしながら、菜園に人の侵入するのを防ぐ一つの方法として、柳の枝を折ってまがきとする行爲は素朴なかたちての自分のものに對する防衛手段にちがいない。いや、むしろ精神的に自己を安堵させる所爲といった方がいいかもしれない。

したがって、自己を安堵させるための方便として柳の枝を使うものでもあったと見れば、そこに柳の枝を魔除・護符とみなす端緒もあるといってよかろう。

結局、中國の古代・中世においては、楊柳はただそこに生えていただけの景物としての樹木ではなく、人間の離別の情を證明するための象徴としての機能さえもっていたということである。

最後に、「仁遠カランヤ。我レ仁ヲ欲スレバ、斯ニ仁至ル」という箴言が、『論語』述而篇にあるが、このように

人の道の實踐に關する古くからの要請て、送別のさいのそれは、楊柳を折って贈るという行爲において、そのセレモニーは完成されている。そしてそれは、だれしもの無事への欲求や祈りにはじまり、だれしもが氣輕にやれる身近な楊柳とのかかわりの上て、生活上の信仰として根づいていったものてあろうというのか、私の把握てあり持論てある。

## 三

次に唐代の送別詩に見える詩風（読みぶり・傾向）について管見を論述してみよう。

唐代送別詩の詩風には、二種類の傾向かあるように思われる。

その一つは、唐代詩人のユニーク（独自）な詩風と思われるか、別離にありかちなめめしい感傷をこばみ、雄々しく別れようといったますらおぶり（男性的な詩風）がそれてある。

いま一つは、傳統的な樂府の情緒（温柔敦厚）を歌った余情ゆたかな詩風がそれてある。

そして二者に共通な詩想としては、

第一に、酒を勸め、旅立つ友の消魂を慰安したり、旅先の危機に對していましめたりする友情の表出があること。

第二に、情をのへるのに景の描寫に力を盡くし、景の美しさ、明るい華やかさが、それとは裏腹に情の世界をいっそうしみじみとしたものにし、つまり、情の世界が景の中に、ひそかに刻みこまれ、薫じこめられ、それが詩句の外に余韻余情として搖曳しているということ。

これらの詩想が唐代送別詩のライトモチーフ（主調低音）とも呼ぶべきもので、讀者を魅了する最大のそして普遍的な要因と考えられる。

それでは、唐代詩人特有の雄々しさを主張する筆法で描寫される送別詩は何に起因するものであろうか。それを解明するために、ここに唐代詩人の氣風とは對照的な前代南北朝の送別に關する意識を代表するものとして、北齊の顏之推の撰になる『顏氏家訓』卷二、風操第六に、エピソードをふくむ好個の資料が見られるので、ちなみに引用し參照することにしよう。

「別易會難，古人所重；江南餞送，下泣言離。有王子侯，梁武帝弟，出爲東郡，與武帝別，帝曰：『我年已老，與汝分張，甚以惻愴』。數行淚下。侯遂密雲，赧然而出。坐此被責，飄颻舟渚，一百許日，卒不得去。北間風俗，不屑此事，岐路言離，歡笑分首。然人性自有少弟淚者，腸雖欲絶，目猶爛然；如此之人，不可強責。」

（別れは、容易なのに、会うのは至難であるので、昔の人は別離を大切にした。江南地方では、旅立つ人を見送る場合、涙を流して、別れの挨拶をいった。侯の爵位をもった帝に係累のある君がおられた。君は梁の武帝の弟君であった。時に弟君は、都から東方の郡に赴任されることになったので、兄の武帝のもとに別れの挨拶に出かけられた。すると帝は『わしも、もう年じや、お前と別れるのはとても悲しくてつらい』といって、さめざめと涙を流された。ところが、弟君の方は、やるせない気持て胸かしめつけられはするものの、涙を流すまでにはいたらず、きまりわるげに顏を赤らめて退出された。しかしながら、弟君は、このことのためにとがめられ、帝の気分を害してしまい、舟つき場でぶらぶらと百日ばかりされていたが、結局任地へ赴かれることは許されなかった。―さて、北方の風習では、こうした別れ方をいさぎよしとしない。岐路で、「さようなら」といって、笑いながら別れるものである。なるほど人は生まれつき、涙の少ない体質の者もあろう。心では、悲しい思いをしていても、眼は明るくかがやき。涙にくもることのない人だっているはずである。こうした体質の人に対して、涙を流すよう責めるのは、無理な話である。）

考―送別詩をめぐって―

一讀するに、人はひとたび別れると、再び會うのは至難のことである。だから古人は別離を重んじ大切にした。宜なるかなで、別離はなによりも人の心を傷めるものであるがゆえに大切に對處されたということであろう。

こうした心情が、古來送別の詩を頻出し、名作をうみだす契機となったにちがいない。

唐詩でも、この趣旨と全く同じ心情を(1)杜甫（盛唐）は、「衛八處士ニ贈ル」（五古）の冒頭で、「人生相見ザルコト、動モスレバ參ト商トノ如シ」といい、(2)はたまた別離の感情を、「李白ヲ夢ム」[15]（五古）の冒頭で、「死別ハ已ニ聲ヲ呑メドモ、生別ハ常ニ惻惻タリ」と吐露している。(3)李商隱（晩唐）は、「無題」（七律）の冒頭で、「相見ル時ハ難ク、別ルルモ亦タ難シ」[16]というし、(4)于武陵（晩唐）にいたっては、「勸酒」（五絶）の結句で、「人生別離足ル」[17]といい、人生に別離が遍在するものであれば、嘆くより明るく飲んで別れようとひらきなおった感慨はユニークである。

畢竟、別離を尊重し、大切にした理由は、以上の『顏氏家訓』の辭句や唐詩の詩句が示唆するところにつきよう。

さらに、つきつめて考えた場合、杜甫が「李白ヲ夢ム」の冒頭で對比的に指摘している「死別」と「生別」という二つの離別に對する感情はどうであろうか。この詩を見るかぎりでは、「死別」の悲しさはもとより深く人を涙に沈ませるか、時かその悲しみをしだいにうすめてくれる。しかし、「生別」は心の痛みが消えるということがないという感慨に見受けられる。それは、まるで『楚辭』・九歌に見られる、

悲莫悲兮生別離　悲ンミハ生別離ヨリ悲シキハ莫ク、
樂莫樂兮新相知　樂ンミハ新相知ヨリ樂シキハ莫シ。

であって、人生における友との出會いは無上の樂しみであるか、逆に友と離別して生きることはこの上ない悲しみ

を生むものである。

したがって、生別離というこの上ない悲哀の感情が、送別の詩をうみだすわけである。

杜牧（晩唐）は「贈別」（七絶）の冒頭で、こうした悲しみの極点ともいえる感情を、「多情ハ卻ツテ似タリ、總ベテ無情ナルニ」[18]と描寫しているが、別れにさいして涙ひとつこぼさない作者の冷淡な態度が連想されるが、それは別れが悲しくないからではない。逆に別れがあまりに悲しいからである。感情の高揚が極点に達すると人はかえって無感動な状態のように、無表情になることがあるといった鋭く人間の内面をとらえた表現であるが、このパラドックス（逆説）のみごとさは、晩唐という唐詩の完成期の一つの結晶でもあろう。

さて、こうした生別離の悲哀を表現するのに『顔氏家訓』では、江南の人は涙を流して、惜別の情を示し、北方の人は、涙を流すなんていさぎよしとせず、岐路（わかれみち）で笑って別れるというが、南北の風土の違いの如く、南北人の氣風の違いが顯著であって面白い。

その江南の人々が涙を流して、惜別の情を表明する様式は、すなおな人情にもとづく善意の表現であって、めめしいといえばそれまでであるが、それは人間の美的な行爲の證左（あかし）で、批判の對象とすべきものではなかろう。

ところが、唐代の送別詩を概觀すると、まるで『顔氏家訓』に記載されている北方の人のように、生別離の悲しみを、見送る人は、旅立つ人に酒を勸めることでいやし、旅立つ人の消魂の心情に對しては酒を飲ませることで、愁を消させようとする雄々しい行爲が見られる。惜別の情は、涙を流して別れる江南の人と同じように深いにもかかわらず、別れの涙をこばむ姿勢がそこには歴然と存在する。

それでは、唐代送別詩に見られる涙をこばみ、雄々しい離別を友情のあかしとする詩句を選出引用して、そのユニークな實態をたどってみよう。

(1)まず初唐では王勃の「杜少府ノ任ニ蜀州ニ之クヲ送ル」（五律）の尾聯「爲ス無カラン、岐路ニ在リテ、兒女ト共ニ巾ヲ沾スヲ」（もうやめよう、別れ道で女子供のように手巾を涙でぬらすようなことは。）

(2)盛唐では、王昌齢の「芙蓉樓ニテ辛漸ヲ送ル」（七絶）の轉結句「洛陽ノ親友如シ相問ハバ、一片ノ冰心玉壺ニ在リト」（洛陽の親友がもしわたしのことをたずねたら、どうか、清らかな氷が一つ白玉の壺の中にあるような心境でわたしは居ると答えてほしいと。）

(3)同じく盛唐高適の「董大ニ別ル」[19]（七絶）の轉・結句、「愁フル莫カレ前路ニ知己無キヲ、天下誰人カ君ヲ識ラザラン」（行く先に知己がないなどと心配なさるな。天下到る処、誰一人君を知らない者はないのだから、心丈夫に旅立ちたまえ。）

(4)盛唐李白の「友人ノ蜀ニ入ルヲ送ル」[20]（五律）の尾聯、「升沈應ニ已ニ定マルベシ、必ズシモ君平ニ問ハザラン」（どうせ人の世の浮沈は前もってきまっているにちがいない。くよくよしても始まらぬ。成都の嚴君平に占ってもらうまでのこともないだろう。）

(5)盛唐李頎の「魏萬ノ京ニ之クヲ送ル」[21]（七律）の尾聯、「是レ長安ハ行樂ノ處、空シク歳月ヲシテ蹉跎タリ易カラシムル莫カレ」（長安は、何としても遊楽の地だ。君よ貴重な時間を空しいものにしないよう気をつけられよ。）

(6)中唐韓愈の「北極李觀ニ贈ル」[22]（五古）の最後の四句、「方ニ金石ノ姿ト爲リテ、萬世縮磷スルコト無カラン、兒女ノ態ヲ爲シテ、憔悴シテ賤貧ヲ悲シムコト無カレ」（今からは金石のように固く結びついて、いつまでも友情を変色さ

せたりすりへらしたりしないようにしよう。女子供のようなめめしい態度で、しおたれながら貧賤をなげくことはないよ。)

(7)晩唐陸龜蒙の「別離」(五律)、晩唐の詩人ながら、剛直で意志堅固な雄々しさが全體にみなぎっている。

「丈夫涙無キニ非ズ、離別ノ間ニ灑ガズ、劍ニ仗ッテ樽酒ニ對シ、遊子ノ顏ヲ爲スヲ恥ズ、蝮蛇一タビ手ヲ螫サバ、壯士疾ク腕ヲ解ク、思フ所ハ功名ニ在リ、離別何ゾ嘆ズルニ足ラン」(23)(ますらおとて涙のない者ではない。ただそれを別離のさいに流さぬだけである。劍に仗って樽酒を傾け、旅ゆく者のめめしい顏などするのを恥じる。毒蛇に一たび手をかまれたら、壯士はすぐにその腕を切りとるという。男たる者、一旦功名を志したからには、一時の別れなど、なんで悲しむことがあろう。)

以上、友を送るさいのこれらの詩句は、趣きのちがいはあるものの、いずれも慷慨悲壯な調べであり、意氣軒昂である。そして、その男性的な詩風が、同じ系譜に屬するものであること、これまた明らかである。

官吏でもあったかれら詩人たちのこうした氣概は、いわば唐帝國のもつ覇氣に由來するものであろうか。とにかく、南朝のめめしい氣風を一掃した感じで、唐詩の獨自性をそこに見るものである。

それでは、こうした雄々しい氣風は、どうして形成されていったものであろうか。

私はその起因する根據を、王勃(初唐)の「杜少府ノ任ニ蜀州ニ之クヲ送ル」(五律)の詩句中の言葉が、それをときあかす素材でもあると考える。

城闕輔三秦　城闕三秦ヲ輔トシ

風煙望五津　風煙五津ヲ望ム

與君離別意　君ト離別ノ意
同是宦遊人　同シク是レ宦遊ノ人
海內存知己　海內知己ヲ存スレバ
天涯若比鄰　天涯モ比鄰ノ若シ
無爲在岐路　爲ス無カラン岐路ニ在リテ
兒女共沾巾　兒女ト共ニ巾ヲ沾スヲ

端的にいえば、右の五律の前聯と後聯の四句に雄々しい氣風をうみだす理由が包含されていると推考するものである。

いうまでもなく、この部分は五律の規則に從って、對句で吟じられているが、それが類似の事柄をくりかえす退屈な對句をさけ、上句から下句へと論理を直線的につなぐ、いわゆる流水對を用いているため、流動的ななめらかさを發揮して、すっきりしたものが感じとられる部分でもある。それは、「ここで君と別れるわたしの氣持は、君もわかってくれるであろう。わたしも去りゆく君の氣持がよくわかる。というのも、二人とも同じ宦遊の人、つまり、各地を流れ歩く旅暮らしの役人の身の上だから、お互いに別れの悲しいことはよくわかり合っているはずだ。だから廣い天下に眞に理解し合える友人がいるかぎり、たとえ身は大空の涯に離れていようとも、鄰りあわせに住んでいるようなものではないか」と、いったぐあいである。そこには何の感傷も見られない。蜀州への赴任に氣のすすまぬ友人の旅立ちを男らしくからっと歌いあげているといった感じである。これはなぜであろうか。

だからといって、それは離別に對して薄情であったり、諦觀視したそれでは決してない。

それを私は、宦遊の人として、同じ運命にある者が、しばしばくりかえされる離別の體驗の中から生みだした強い連帶の意識から出た言葉ではなかろうかと把握するものである。

したがって、これは強がりの言葉でもなく、お互いにいたわり合う言葉でもない。いやおうなしに背負わされた唐代の下級官吏の宿命的な悲哀感に對する自覺の上に立つ言葉であるということである。それこそ離別を輕んずるがごとく見えて、實は眞に離別に泣く心であろう。だからこそ、雄々しく悲壯でもあって、いっそう人の心を打つものでもあると考えたい。

とにかく、こうした宿命的な悲哀感に對する自覺があったればこそ、宦遊の人であるかれらは、送別の行爲と場所を大切にし、そしてそれがくりかえされたが故に、多くの送別詩がうみだされた。いうまでもなく、地方官を轉々と旅暮らしせざるを得ないという不遇さが、それにともなって友をうみだし、旅をする機會も多くし、送別詩を多くうみだしていったわけである。

あるいはまた、既存の貴族階級に對抗する新興地主階級出身の官吏として、お互いに一種の連帶感をともなう友情によって結ばれていたことも明白である。だとすれば、送別詩が、友情の證明(あかし)として眞情を吐露するものであったこともおのずと首肯される。

ここで、雄々しい詩をうみだしたゆえんについて再度整理しておこう。

送別詩をつくる詩人たちが、新興地主階級の出身であったが故に、既存の貴族階級の重壓に對抗しながら官吏づ

とめをするなかで、同じ官吏としておのずと連帶の意識がつちかわれて友情をはぐくんでいくという素地があったということ。さらに、かれらは宦遊の人という不遇な身分であって、轉々とした旅暮らしの中で、宿命的な悲哀感を自覺せざるを得なかったこと。そうした境遇と意識の中での送別詩は、おのずと連帶の意識の表明にならざるを得なかったということ。そして結局、そうした階級的重壓と、不遇さの中で、おのずと雄々しい氣風はぐくまれ、高揚され、それがますらおぶりの送別詩を形成していったという判斷である。その點、傳統的な樂府の情緒を歌った哀切なひびきをもつ送別詩と一線を畫するものであったということを強調したい。

それでは、傳統的な樂府の情緒をふまえた送別詩とは、どういうユニークさをもっていたものであろうか。これに對して、私は送別詩の共通な詩想の第二にあげている詩句の言外に哀切な余韻余情を搖曳させている詩が、一つの特異性として、それに相當するものであると受けとめている。

その顯著な詩が、すでに第二章で例示している、(1)王維（盛唐）の「元二ノ安西ニ使スルヲ送ル」（七絶）をはじめとして、同じく(2)王維の「送別」（五絶）「山中相送リ罷ミ、日暮柴扉ヲ掩フ、春草明年綠ナルモ、王孫歸ルヤ歸ラザルヤ」[24]や、はたまた、(3)王維の「臨高臺、黎拾遺ヲ送ル」（五絶）、「相送リテ高臺ニ臨メバ、川原杳トシテ何ゾ極マラン、日暮飛鳥還ルニ、行人ハ去ツテ息マズ」[25]などであるが、それは王維らしい靜かな境地を示すとともに、その詩句は、「送別」では『楚辭』の招隱士に、「王孫遊ビテ歸ラズ、春草生ジテ萋々タリ」とあるのをふまえ、「臨高臺」で魏の王粲の『登樓賦』に、「此ノ樓ニ登ツテ回望スレバ、平原遠クシテ目ヲ極ム、白日忽トシテ其レ將ニ遠カラントス、征夫行イテ息マズ」などの句があるのをふまえて、樂府の情緒を歌いあげ、美しく哀切な詩をつく

りあげている。

さて、(4)李白にも送別、留別の詩が多いが、それは李白の放浪の生涯から察するに、旅をするうちには、人との出會い、人との別れも自然多かったであろう。それが、美しくも哀しい離別の情緒を吐露させることになったものと思われる。なかでも、「黄鶴樓ニテ孟浩然ノ廣陵ニ之クヲ送ル」(七絶)の轉・結句「孤帆ノ遠影碧空ニ盡キ、唯ダ見ル長江ノ天際ニ流ルルヲ」は、起・承句に見られる時は花がすみの三月、往くは揚州歡樂の地、といった李白一流のはなやかな調子の中で、その悵望の情は哀切な離別の余韻余情をひとしお感じさせる。

さらに、(5)中唐・劉長卿の「重ネテ裴郎中ノ吉州ニ貶セラルルヲ送ル」(七絶)の「猿啼キ客ハ散ズ暮江ノ頭、人ハ自ラ傷心水ハ自ラ流ル、同ジク逐臣ト作ッテ君更ニ遠シ、青山萬里一孤舟」[26](日暮れ時、江亭で友を見送る人々も帰り去り、あとには猿の悲しげに啼く声が聞こえてくる。そして私は立ち去りかねて、心を傷めている。ところが無情の江水は、人の悲しみをよそに悠々と流れ去る。さて、君も私も同じく左遷される身となったが、君のゆく先は、私の配所よりさらに遠い。これから青山万里の途を、孤舟を浮かべてゆかれる君の心はどうであらう。)は、前述している王勃(初唐)の「同ジク宦遊ノ人」に對して、「同ジク逐臣ト作ッテ」(同じく朝廷を逐われる身)と、より悽愴な境遇でありながら、前者に見られる連帶の意識も、雄々しい男性的な氣風も希薄である。そして見送る者も見送られる者も、その心はわびしさにたえぬといったつきぬ余情が、「暮江ノ頭」や「一孤舟」の詩句でいっそう強調されているように思われる。

(6)晩唐になれば、まず杜牧の「贈別」其二(七絶)の「多情ハ却ッテ總テ無情ナルニ似タリ、唯ダ覺ユ樽前笑イノ成ラザルヲ、蠟燭心有り還タ別レヲ惜シミ、人ニ替ッテ涙ヲ垂レテ天明ニ到ル」(感じやすい心は、万感胸に迫まる

と、默りがちになり、却って何の感慨もないかのようである。ただ杯を前にして、笑おうにも笑えぬ。蠟燭にも別れを惜しむ心があるのか、人にかわって夜どおし涙を流しているよ。）は、多情の人と無情であるはずの蠟燭とが、別離の場で、その情のあり方を逆轉させた發想は新鮮で、離別の哀愁を効果的に表わしている。この蠟燭の擬人化には、蠟燭のようなはかなく微細な物に心ひかれる晚唐詩人の美意識を背景としたものであろう。とにかく、余情というより傳統的な送別詩に、さらに晚唐朝の技巧と甘い情緒が加味された詩といえよう。

(7)最後に同じく晚唐の韋莊の「古別離」（七絕）は、その題が示すように、別離の詩の傳統をふまえて作ったものであろう。しかし、これまた、晚唐詩特有の情緒を暗示する哀愁のひびきをもつ詩でもある。

「晴煙漠々柳ハ毿々（さんさん）、離情ヲ那（いかん）トモスルナク酒半バ酣（たけなわ）ナリ、更ニ玉鞭（ぎょくべん）ヲ把（と）ッテ雲外ヲ指サセバ、斷腸ス春色江南ニ在リ」[27]（晴れた空に霞がたなびいて、柳の糸は長くたれている。酒半ばたけなわになっても、この別離の情をどうしようもない。そこで鞭をあげて、はるか行く手を指させば、斷腸の思いをさそう春景色が江南の地をおおっているよ。）

作者韋莊は、長安にあって唐末の黃巢の亂にあい、弟妹を失い、みずからも大病をわずらい言語に絕する苦勞をしたという。この詩は起句に柳を出して、送別の風習をふまえ、承句で酒宴での心情を、離情いかんともするなくとストレートに表出し、斷腸の思いをさそう江南の風景で結んでいる。その景と情の美しさと哀切さには、盛唐の詩風を感じさせながらも、詞（詩余）の余韻さえもひびかせている。

さて、これら樂府の傳統をふまえた送別詩について總括すると、いずれも惜別の情緒を、そのまま單刀直入に相手に押しつけるというのではなく、それを一度自己の內部で燃燒させ、凝縮させ、そして純化させているがゆえに

いっそう持續する感慨として、淡白に提示される。だから、離別の哀愁は、詩の最後にいたって高まり、美しい哀切なひびきをかもして妙味もいよいよ深い。

唐代において、送別、離別にさいして雄々しさを主張する送別詩と、樂府の傳統をふまえた送別詩、この二種類のそれは初唐より晩唐にいたるまで並存するものである。前者は、初唐・王勃の「杜少府ノ任ニ蜀州ニ之クヲ送ル」（五律）より晩唐・陸龜蒙の「別離」（五律）までが、それであるとすれば、後者は、盛唐・王維の「元二ノ安西ニ使スルヲ送ル」（七絶）に、はじまって晩唐・鄭谷の「淮上ニテ友人ト別ル」（七絶）が、そのフィナーレを飾るものといえよう。

そして、後者の最後を飾る鄭谷の七絶「淮上ニテ友人ト別ル」は、傳統的な離別詩の、さまざまな要素や感覺をふまえていて一種の完成された形で示されている。それは、王維の「元二ノ安西ニ使スルヲ送ル」と相呼應するものといった感じさえする。

揚子江頭楊柳春　　揚子江頭楊柳ノ春
楊花愁殺渡江人　　楊花愁殺ス江ヲ渡ルノ人ヲ
數聲風笛離亭晚　　數聲ノ風笛離亭ノ晚
君向瀟湘我向秦　　君ハ瀟湘ニ向ヒ我ハ秦ニ向フ

パラフレーズするまでもないが、この詩では、江頭の楊柳は、その枝を折って旅立つ人を見送ったという漢代以來の風習、折楊柳の行爲を連想させるものであり、笛の音は、離別の曲、折楊柳の旋律を暗示さえしている。さら

に夜、離亭で酒をくみかわす作者と友とは、一夜あければ、南と北の船上に、それぞれわが身を置かねばならぬ。瀟湘（友）と秦＝長安（作者）と相い隔たること萬里の地を提示するのは、再會の不可能なことの間接的な表示でもある。友の姓名は、記されていないが、それがかえって、離別の哀愁を擴大させている。

思うに、王維や李白などによって、はぐくまれてきた傳統的な送別詩の普遍的な作詩法は、この晩唐の鄭谷の詩に、そのままの形で受けつがれているといえるだろう。

ここで、二者の送別詩に見られる表現技巧の特異性について再度論述すると、

前者の雄々しさを主張する送別詩は、旅立つ人に對して常に呼びかけるような言い方で、つまり單刀直入な手法にそのユニークさを見るものである。そしてそのストレートな表現は、ややもすると、別離を輕視しているかに見られがちであるが、實は別離に泣く心理のカモフラージュと思われる。

後者の傳統的な樂府の情緒を歌った送別詩は、前半に景が明確に描かれ、それが後半の情の世界、つまり別離にともなう哀愁の情緒をより高揚させる機能をはたしている。しかし、それが前者とは對照的に婉曲な表現であるがために、いっそう余韻余情の効果を發揮し、妙味のある詩を生みだしている。

したがって、李白の「友人ヲ送ル」（五律）は、その婉曲な表現技巧の妙味を鑑賞しうるティピカルなものの一つと思われるので、ちなみに、引用して確認しておこう。

青山横北郭　　青山北郭ニ横ハリ、
白水遶東城　　白水東城ヲ遶ル

此地一爲別　　此ノ地一タビ別レヲ爲シ
孤蓬萬里征　　孤蓬萬里ニ征(ゆ)ク
浮雲遊子意　　浮雲遊子ノ意
落日故人情　　落日故人ノ情
揮手自茲去　　手ヲ揮ッテ茲(ここ)ヨリ去レバ
蕭蕭班馬鳴　　蕭々トシテ班馬鳴(はんばいなな)ク

一瞥するに、起聯が美しい對句になっているので、頷聯は對を流し、頸聯に景と情をかねた對句をもってきて、尾聯で馬も別れを悲しんでか、うらがなしくいななくという。

馬を媒介とした婉曲な表現で、友との惜別の情を一段と高めている。つきぬ余情とはこれである。しかもそれが李白らしく淡白に、一氣呵成に歌いあげられているので、いよいよ滋味豊かなものが感じられる。

最後に、以上こもごも論述してきた對照的な二者の送別詩が、唐代送別詩の二大潮流であるということを提示するものである。

そしてそれらの送別詩が、唐詩の世界に友情・人情の精華を結晶させた功績は、送別詩特有のメリット（値打ち）であろうと論斷するものでもある。

## 四

唐代の送別詩に留意してきたことからの余得と思っているか、送別詩の表現されている詩型について推考しておこう。

もともと離別というものは、強い感動や心の高揚をうみやすいものである。――それだけに、離別の屬性である變化、推移への不安や愛惜は、詩的感動の中心となって詩作という行爲を容易にしたと考えられる。そしてさらに、それが唐代の詩人たちにとっては、日常生活の中で慣習的な行爲と思われるほど普遍化していたということである。

したがって、送別詩は古體詩でも近體詩でも詠じうる安易な素材であった。

だとしても、送別詩の詩型には、七言絶句によるものが壓倒的に多い。傳統的な送別詩にいたっては、その七絶の詩が最も適當な形式であるといっても過言ではないといった感じさえする。それはなぜか。これに對して、私は王維の「元二ノ安西ニ使スルヲ送ル」（七絶）に、もとづいて一考するに、この詩が實際送別の宴席でしばしば愛唱されていたことを思う時、それは七絶という詩型が、とにかく愛唱されやすかったというのが主要な原因であったろうと思うものである。

では、他の詩型の場合はどうであろうか。まず、五絶の場合は簡潔すぎて心情の妙味や叙情性のひろがりを描ききれないという欠點があったのではないかと考えられる。

一方、律詩、排律、古詩では、逆に對句や典故にわずらわされて、つい説明的になったり、あるいはまた、長すきて朗唱に不向きであったり、作品としてはすぐれていても、余韻や余情の欠落で普及しうる送別詩には、おそら

くなりにくかったということではあるまいか。

その點、七絶の場合、その集約性や象徴性の面でも、形式そのものが正鵠を射ていて、讀者や聞き手の感情移入を容易にしたということと、なによりもそれが歌曲性や樂曲性に適していたということが、日常的、儀禮的な送別詩を愛唱されやすいこの七絶の詩に、おのずと定着させていったように思われてならぬ。

註

(1) 王維「酌酒與裴迪」―酌酒與君君自寬・人情翻覆似波瀾・白首相知猶按劍・朱門先達笑彈冠・草色全經細雨濕・花枝欲動春風寒・世事浮雲何足問・不如高臥且加餐。

(2) 高適「邯鄲少年行」―邯鄲城南游俠子・自矜生長邯鄲裏・千場縱博家仍富・幾處報讎身不死・宅中歌笑日紛紛・門外車馬如雲屯・未知肝膽向誰是・令人却憶平原君・君不見今人交態薄・黃金用盡還疎索・以茲感歎辭舊遊・更於時事無所求・且與少年飲美酒・往來射獵西山頭・

(3) 杜甫「貧交行」―翻手作雲覆手雨・紛紛輕薄何須數・君不見管鮑貧時交・此道今人棄如土・

(4) 張謂「題長安主人壁」―世人結交須黃金・黃金不多交不深・縱令然諾暫相許・終是悠悠行路心・

(5) 『馬の鼻向け（餞）』・『馬の鼻を立てなおす』の具體例・

「舟路なれども、うまのはなむけす。」〈土佐日記〉

「むかし、縣（あがた）へゆく人に、うまのはなむけせむとて」〈伊勢物語・四四〉

「みちのくにまかりける人に、はなむけし侍りけるに」〈新古今・離別・詞書〉

「御馬の鼻を立てなほし、都にかえらせ給ひける。」〈平瑠璃・出世景清〉

(6) 王昌齡「芙蓉送辛漸」―寒雨連江夜入吳・平明送客楚山孤・洛陽親友如相問・一片冰心在玉壺・

(7) 杜甫「贈衛八處士」―人生不相見・動如參與商・今夕復何夕・共此燈燭光・少壯能幾時・鬢髮各已蒼・訪舊半爲鬼・驚呼熱中腸・焉知二十載・重上君子堂・昔別君未婚・男女忽成行・怡然敬父執・問我來何方・問答未及已・驅兒羅酒漿・夜雨剪春韭・新炊閒黃粱・主稱會面難・一擧累十觴・十觴亦不醉・感子故意長・明日隔山嶽・世事兩茫茫・

(8) 李白「黃鶴樓送孟浩然之廣陵」―故人西辭黃鶴樓・煙花三月下揚川・孤帆遠影碧空盡・唯見長江天際流・

(9) 楊巨源「折楊柳」—水邊楊柳綠煙糸・立馬煩君折一枝・唯有春風最相惜・慇懃更向手中吹・

(10) 張喬「寄維揚故人」—離別河邊綰柳條・千山萬水玉人遙・月明記得相尋處・城鎖東風十五橋・

(11) 溫庭筠「折楊柳」—御陌青門拂地垂・千條金縷萬條糸・如今綰作同心結・贈與行人知不知・

(12) 孟郊「折楊柳」—楊柳多短枝・短枝多別離・贈遠累攀折・柔條安得垂・青春有定節・離別無定時・但恐人別促・不怨來遲遲・莫言短枝條・中有長相思・朱顏與綠楊・併在別離期・

(13) 以上の第三の說と第四の說については、「八木澤元氏の「中國における送別の詩」(霞城の春—中國文學論集—)を參照。

(14) 四つの通說のような楊柳に對する心情の仮託は、わが國の萬葉の世界に見られる〃魂結び〃の信仰に似ている。それは旅立つ人の魂をつなぎとめる意義が強く、その魂が旅先で遊離失散してしまわないように、そして再び出發地にもどってくるように約束するための呪法である。

(15) 杜甫「夢李白」—死別已呑聲・生別常惻惻・江南瘴癘地・逐客無消息・故人入我夢・明我長相憶・恐非平生魂・路遠不可測・魂來楓林青・魂返關塞黑・君今在羅網・何以有羽翼・落月滿屋梁・猶疑照顏色・水深波浪濶・無使蛟龍得・

(16) 李商隱「無題」—相見時難別亦難・東風無力百花殘・春蠶到死絲方盡・蠟炬成灰淚始乾・曉鏡但愁雲鬢改・夜吟應覺月光寒・蓬山此去無多路・青鳥殷勤爲探看・

(17) 于武陵「勸酒」—勸君金屈巵・滿酌不須辭・花發多風雨・人生足別離・

(18) 杜牧「贈別」—多情却似總無情・惟覺樽前笑不成・蠟燭有心還惜別・替人垂淚到天明・

(19) 高適「別董大」—十里黃雲白日曛・北風吹雁雪紛紛・莫愁前路無知己・天下誰人不識君・

(20) 李白「送友人入蜀」—見說蠶叢路・崎嶇不易行・山從人面起・雲傍馬頭生・芳樹籠秦棧・春流遶蜀城・升沈應已定・不必問君平・

(21) 李頎「送魏萬之京」—朝聞遊子唱離歌・昨夜微霜初度河・鴻雁不堪愁裏聽・雲山況是客中過・關城曙色催寒近・御苑砧聲向晚多・莫是長安行樂處・空令歲月易蹉跎・

(22) 韓愈「北極贈李觀」—北極有羈羽・南溟有沈鱗・川原浩浩隔・影響兩無因・風雲一朝會・變化成一身・誰言道里遠・感激疾如神・我年二十五・求友昧其人・哀歌西京市・乃與夫子親・所尙苟同趣・賢愚豈異倫・方爲金石姿・萬世無緇磷・無爲兒女態・憔悴悲賤貧・

(23) 陸龜蒙「別離」—丈夫非無淚・不灑離別間・仗劍對樽酒

・恥爲遊子顏・蝮蛇一螫手・壯士疾解腕・所思在功名・
離別何足歎・

(24) 王維「送別」―山中相送罷・日暮掩柴扉・春草明年綠・
王孫歸不歸・

(25) 王維「臨高臺、送黎拾遺」―相送臨高臺・川原杳何極・
日暮飛鳥還・行人去不息・

(26) 劉長卿「重送裴郎中貶吉州」―猿啼客散暮江頭・人自傷
心水自流・同作逐臣君更遠・青山萬里一孤舟・

(27) 韋莊「古別離」―晴煙漠漠柳毵毵・不那離情酒半酣・更
把玉鞭雲外指・斷腸春色在江南・